

タカラバイオ株式会社 2010年3月期決算説明会 質疑応答内容

2010年5月17日 野村證券日本橋本社 7F 講堂（東京）

回答者 代表取締役社長 仲尾 功一、代表取締役副社長 木村 睦

【質問1】 クロンテック社について

- Q クロンテック社製品について、為替の影響以上に売上高が下がっている理由は？
- A 主な要因は、クロンテック社のPCR関連製品の売上が大幅に減少したためです。ある会社の DNA チップ解析では、クロンテック社の PCR 酵素を使用することが推奨されていますが、DNA チップ解析が研究領域として急速に減少しており、それに伴って PCR の売上が減少しています。一方、クロンテック社は多くの新製品を開発、発売しており、新製品販売を強化していきたいと考えています。
- Q クロンテック社の PCR 酵素のDNAチップ関連分野への売上比率はかなり高いのでしょうか？
- A PCR酵素の売上はある程度の割合を占めています。
- Q 11/03 期の予算をみると、為替の影響を除いてみればクロンテック社製品の外部売上高が増加する計画になっていますが、今後は欧米の売上高も拡大していく方向にあるのでしょうか？
- A 新製品開発の強化、売上拡大の余地があると考えられるアジア・パシフィック地域でのマーケティング力強化という、研究開発と営業の両面での取組みによって売上を伸ばしていく計画になっています。
- Q クロンテック社製品の中国への製造移管効果(コストダウン)はどれぐらいあるのでしょうか？
- A 10/03 期は、前期比で 2.6 億円の効果があったと考えており、11/03 期もほぼ同額の効果を見込んでいます。製造移管効果は、09/03 期から 11/03 期までで累計 6.7 億円となり、その後はこの水準が継続する見込みです。

【質問2】 MazF/HIV 遺伝子治療について

- Q MazF/HIV 遺伝子治療の臨床開発を米国で展開するということを打ち出されています。中国でのサルの試験の結果は発表されていませんが、このような計画となった経緯はどのようなものでしょうか？
- A 鹿児島大学と共同で行っているエイズウイルスや細胞を用いた試験(in vitro 試験)にて、有効性に関する良好なデータを得ておりましたので、これらのデータ等を元に HIV/エイズの治療薬の臨床開発の経験が豊富なペンシルベニア大学の研究者と協議を行いました。協議の結果、マウスモデル等を用いた非臨床試験のデータを追加で取得する等、米国での臨床試験の開始に向けた作業を共同で実施していくこととなりました。
- 一方、サルの試験については、中国では有用なデータを迅速に得ることが難しい状況でしたので共同研究を終了し、中国と並行して進めていた医薬基盤研究所と共同研究を実施中です。良好なデータが得られれば臨床試験の申請にも利用していきたいと考えています。

【質問3】 医食品バイオ分野について

- Q 中期経営計画では、医食品バイオ分野の研究開発費が10/03期の6億円から11/03期3億円、12/03期2億円と大きく減っていますが、新製品の開発に影響はないのでしょうか？
- A 減少させている研究開発費には主に2つのものがあります。1つは、新たな機能性食品素材を探索するプロジェクトを減少させました。健康食品については、現在ある5つを含め、全体で7つぐらいの素材をターゲットとして、販売促進に利用できるアプリケーションデータ、特にヒト介入試験のデータを取得することに力をいれていきたいと考えています。もう1つはキノコ事業で、マツタケを含めた新規キノコの開発は続けていきますが、現在生産しているキノコの新規栽培法など、コストダウンや品質管理のための研究開発に少しシフトしていきたいと考えております。
- この結果、研究開発費が減少する計画になりましたが、中期経営計画にあるキノコ・健康食品の売上増加については効率的な研究開発投資によって達成できると考えています。

【質問4】 配当政策について

- Q 今後の配当政策をどのように考えているのでしょうか？
- A 株主の皆様への利益還元については重要な経営課題と認識しておりますが、当社グループの最大の目標は、当社の成長事業と位置づけている遺伝子治療・細胞医療を商業化することであり、この分野ではしばらく研究開発投資が先行します。遺伝子治療・細胞医療の関連技術を蓄積し、遺伝子医療事業を成功させ、企業価値向上を図ることで、株主の皆様の期待にお応えしていきたいと考えています。

以上